

〈研究論文〉

アダム・スミスの分業論と価値論[※]
 —方法の観点から—

酒井 進

I はじめに

『国富論』第1編の分業論と価値論(第1～5章)は、どのような方法にもとづいて展開されたのか、また、スミスの方法にそくして分業論＝価値論を検討すると、それはどのように理解されてくるか——こうした問題を、スミスの『修辞学・文学講義』ならびに「天文学史」を手懸かりとして考察することが、本稿の課題である。

『修辞学・文学講義』,「天文学史」は従来注目されることが比較的になかったが、近年のスミス研究はそれらをも正当に問題的視野のなかにおさめ、研究の間口と奥行を広げ、深めつつある。ここではその成果をもふまえて、それらの内容を当面の課題に必要な範囲で大づかみに概観しておこう。¹⁾

『修辞学・文学講義』²⁾は単なる文学論でもなく、また、「言いまわし」や「言葉のあや」などを扱う狭義の修辞学でもない。それは、他者を説得するために人はみずからの主張をいかに伝達し、叙述すべきかを、その伝達＝叙述の方法にそくして問題にする、いわば広義の修辞学なのであった。それは、説得的な伝達＝叙述の方法についてのスミスの論理学なのであった。スミスはそうした「方法としての修辞学」を、古今の文学書や歴史書、哲学書等を素材として展開し、種々の目的に応じた叙述の方法を考察するのだが、その際、ニュートンの「自然哲学」にふれ、それが従来説明困難とされた複雑な天体現象を体系的に、かつ説得的に説明しえたとして、ニュートン哲学の叙述の方法を高く評価したのである。

目 次

〈研究論文〉

アダム・スミスの分業論と価値論.....	酒井 進 (1)
編集後記.....	(20)

また、「天文学史」³⁾はその正式なタイトル——「天文学の歴史を例証とする哲学的探求の原理」——から知られるように、単に天文学の歴史を歴史として論じたものではない。スミスはそこで、「哲学的探求の原理」、つまりは哲学研究の方法がいかにあるべきかを、天文学の歴史そくして検討していたのである。その場合、スミスの主たる関心の一つは、天動説にかわって地動説がどう人々に受容され、納得されるにいたったかを、哲学研究の方法の問題として考察する点にあった。スミスはここでもニュートンの「自然哲学」にふれ、それが地動説の一般化にあずかって力のあったゆえんを、ニュートン哲学の研究方法にそくして解明しようとするのである。

このように『修辞学・文学講義』は叙述の方法を、「天文学史」は研究の方法をそれぞれ問題にしている。それらはこの意味で、マルクスの「経済学の方法」(上向法, 下向法)にはるかに対応する、といってもよい。『修辞学・文学講義』と「天文学史」は全体としてスミスの学問方法論なのである。⁴⁾

では、スミスはそうしたみずからの学問方法論を『国富論』体系の展開にどう活かしたのだろうか。スミスの学問方法論を単なる方法論議に解消せず、学問創造におけるその積極の意味を明らかにするためには、このように問題を設定することが必要であろう。と同時に、『国富論』研究をいま一步押し進めるためにも、方法の観点を導入することは有効であろう。⁵⁾そこで本稿では、ひとまず『国富論』第1編の分業論と価値論に問題を限って、そのうちにスミスの学問的方法を検出し、さらに、スミスに独自の方法の観点から、分業論=価値論の理論内容に若干の考察を加えることにしたい。

※ 筆者はさきに経済学史学会第48回大会(1984年11月)において、これと同じ表題のもとで報告をおこなった。本稿はその報告用原稿に若干の加筆を施して成ったものである。なお、本稿は右の学会報告とともに旧稿「アダム・スミスの経済学と修辞学」(上)、(下)(『専修経済学論集』17巻3号, 19巻1号)を母体としているが、旧稿では触れえなかった二・三の論点を新たに含んでいる

1) 最近の研究文献は前掲拙稿(上)に挙げておいた。なお、ここでは次の文献を追補しておく。天羽康夫「スミス『天文学史』についての一考察」(『高知大学学術研究報告』第25巻)、遠藤和朗「アダム・スミスの『天文学史』と『道徳哲学』について」(1)、(2)(『東北学院大論集』90, 93)。只腰親和「イギリス経験論における方法論的潮流とアダム・スミス」(早坂忠編『古典派経済学研究』(1)雄松堂)。

2) *Lectures on Rhetoric and Belles Lettres*, ed. by J. C. Bryce. in: *Glasgow Edn. of Works of A. Smith*, IV. J. M. ローザン編, 宇山直亮訳『アダム・スミス修辞学・文学講義』(未来社)。

以下、本書からの引用は、このグラスゴー版『スミス全集』により、そのタイトルは、Rhetoric.と略記する。なお、訳文には一部手を加えてある。

3) *The Principles which lead and direct Philosophical Enquiries; illustrated by the His-*

tory of Astronomy. in: Glasgow Edn. of Works of A. Smith, III. 以下、本論文からの引用は、このグラスゴー版『スミス全集』により、そのタイトルは、*Astronomy.*と略記する。

- 4) ただし、スミス自身が叙述の方法（『修辞学・文学講義』）と研究の方法（『天文学史』）とをどれほど意識的に区別し、また関連づけていたかについては問題が残る。これからの課題であろう。
- 5) こうした問題観点は、内田義彦「アダム・スミス——人文学と経済学」（『作品としての社会科学』岩波書店）に負っている。

II スミス分業論とその方法

(1) スミスは『国富論』¹⁾第1章「分業について」を、分業の生産力増進効果の確認からはじめている。その場合、スミスは「とるにたりない」小さなピン・マニファクチュアを例にとり、次のような議論を展開している。すなわち、——ピン作りの作業は約18の工程に分割されており、それを10人の職人がおこなっている。その結果、彼らは一日に一人あたり4800本のピンを製造することができる。しかし、職人が一人で別々に働くならば、おそらく一日に一本のピンも作れない。だから、分業はこの場合、「作業の適切な分割と結合」によって労働の生産力をじつに4800倍にも増進させるのだ（cf. I, pp.14-15/(1)12-13ページ）。

こうしたスミスの議論については、次の諸点に注意を要する。第一に、スミスは普通の人なら見逃すほどの小さなピン製造業を「哲学者」の目で注意深く観察し、「とるにたりない」分業でもその生産力増進効果は4800倍！にも達する、としている点。第二に、その事実をつきつけられた読者は分業の生産力効果にあらためて目をみはり、「讃嘆」の感情（admiration）にかられるであろう、という点。第三に、「讃嘆」感情が強ければ強いほど、読者は分業がなぜそれほどまでに生産力を増進させるのか不思議に思い、「好奇」の感情（wonder）を刺激されるであろう、という点である。²⁾

事実、スミスは分業の生産力増進効果を確認したすぐあとで、みずからその「好奇」の感情にこたえている。すなわち、分業は第一に、職人の技能を改善し、第二に、職場の移動時間を省き、さらに第三に、機械の発明をもたらすとし、分業はこの「三つの異なる事情」のゆえに生産力を飛躍的に増進させる、とスミスはいうのである（cf. I, pp.17-21/(1)15-19ページ）。

このようにスミスは『国富論』第1章冒頭の議論を読者の「讃嘆」と「好奇」の感情に訴えつつはじめているが、そうした議論の進め方はスミスに特徴的で、『国富論』の随所に見られる。たとえば、第1章末尾の議論がその一例である。スミスはそこで次のようにいっている。——「文明社会」では「身分や地位の高い人たちの法外な贅沢にくらべて、労働者（labourer）たちの暮らしは大変質素で単純に見えるが、それでも勤勉で儉約な農夫（peasant）の暮らしは、裸の野蛮人一万人の生命と自由の絶対的支配者（the absolute master）たるアフリカの多数

の酋長の暮らしより大いに優っている」(I, pp.23-24/(1) 22-23ページ)。見られるように、スミスはここで「文明社会」と「未開社会」とを対比し、分業の満面開花した「文明社会」では富裕が一般化する、と指摘している。しかもその場合、スミスは「文明社会」の最下層の「農夫」の暮らしさえ「未開社会」の「絶対的支配者」のそれをしのぐとして、「文明社会」の豊かさをまざまざと描写し、それに対する「讚嘆」の感情を読者にかきたてている。それだけではない。スミスはそうすることで同時に、「文明社会」がなぜそれほどまでに豊かであるのか、その原因に読者の注意をむけ、「好奇」の感情を刺激しているのである。

スミスはここでも読者の「讚嘆」と「好奇」の感情に訴えつつ議論を展開しているのだが、それは「天文学史」でのスミス自身の学問論ないし学問方法論にもとづいている。スミスは「天文学史」の冒頭で、驚きの感情には“wonder”, “suprise”, “admiration”の三つがあり、それらは言葉としてはしばしば混同されるが、相互に区別されるとして、その各々をこう特徴づけている。——「新しく、珍しいものは、正確には wonder と呼ばれる感情をひきおこし、予期しえないものは suprise という感情を、また偉大なもの、美しいものは admiration と呼ばれる感情を刺激する」³⁾このうち当面の問題に関連するのは、「好奇」の感情たる wonder と「讚嘆」の感情たる admiration とであるが、ここではとくに wonder の感情に焦点をあわせて、「天文学史」でのスミスの議論を追ってみよう。

スミスによると、「人間精神 (the mind) にとって、異なる対象間に見出しうる類似性 (resemblances) を観察することは喜びである」⁴⁾。しかし、ある対象がまったく「新奇」であり、それと他の対象との間になんらの「類似性」もない場合、精神は喜びを感じず、かえって動揺し、不安になる。そして、人はその不安、動揺を「鎮静化」(tranquility) しようと自然に努力する。スミスはこうした不安と動揺の精神状態、およびそれを「鎮静化」しようとする精神的努力を wonder の感情だとし、この wonder の感情こそが人間を哲学的探求へと駆り立てる、と考えている。⁵⁾

この後の点について、スミスはこういつている。——異なる対象間になんらの「類似性」も見い出せず、wonder の感情が刺激されると、人々はそれらの対象間に「間隙」(gap), 「隔たり」(interval) があると感じ、それをうめようと努力する。すなわち、人々はこの場合、「思考の移行を滑らかに、自然かつ容易にするために、対象間の間隙をうめようとするか、あるいは外見上分離された対象を結合する (unite) 橋のようなものを探しだそうと努める」⁶⁾。スミスによると、こうした努力が哲学的探求だとされ、それによって対象間の「間隙」がうめられ、バラバラで無秩序な諸対象に首尾一貫した説明が与えられる。その結果、思考の移行はある対象から他の対象へと滑らかにおこなわれ、wonder の感情は自然に「鎮静化」されることになる。

だから、「哲学の目的」は外見上バラバラな諸対象を、いわば「見えざる鎖」(the invisible chain)によって「統合」し、それらを秩序づけ、想像力の混乱(不安と動揺)を「鎮静化」する点にある。この意味で、スミスにとって「哲学は自然の結合原理の学」(Philosophy is the science of the connecting principles of nature)であり、また同時に「想像力に訴える術」(art)なのである。⁷⁾

「天文学史」でのごうした議論をふまえて、先の「未開社会」と「文明社会」との対比をふりかえてみると、ただちに次の諸点に気づく。第一に、「未開社会」と「文明社会」とにはなんらの「類似性」も認められず、両者の間には巨大な「間隙」があるから、読者は wonder の感情を大いに刺激されるであろう、という点。第二に、そうであればこそ、読者はその「間隙」をうめ、wonder の感情を「鎮静化」すべく、自然に哲学的探求を試みるであろう、という点である。

では、「未開社会」と「文明社会」との「間隙」をうめるにはどうすればよいか。「文明社会」が「未開社会」から区別され、富裕の一般化する社会として特徴づけられるのは、そこで分業が満面開花し、生産力が高度に発展しているからである。だから、この両者の「間隙」は、「未開社会」で分業がどうおこなわれたか、そして、それがいかに満面開花するかを問うことで、容易にうめることができよう。事実、スミスは第1章につづけて第2章「分業をひきおこす原理」を展開し、そこでそうした考察を試みている。第2章の内容を先取りしていえば、スミスは人間の本性たる交換性向こそが分業をひきおこすとし、この交換性向を「見えざる鎖」とすることで、「未開社会」と「文明社会」との「間隙」をうめ、両者を「架橋」しようとするのである。

(2) スミスは第2章「分業をひきおこす原理」の冒頭で、分業を発生させるのは「社会全般の富裕を予見したり、意図したりする人間の英知(wisdom)」ではなく、「ある物を他の物と取引し、交易し、交換しようとする性向(propensity)」、すなわち人間の本性たる交換性向だと主張する(cf. I, p.25/(I)24 ページ)。スミスによると、人々の眼中にあるのは自己の利害のみであり、彼らはこの自己への利害関心から交換性向を発揮して諸財貨の交換をおこなう。そして、その意図せざる結果として、労働の分割が自然におこなわれ、分業が発生するのである。

しかし、この交換性向の作用は単に労働分割の側面でのみ理解されてはならない。それは労働を分割すると同時に、交換をつうじて諸財貨を「コモン・ストック」へと編入し、多様で有用な分業労働を相互に結合するのである(cf. I, pp.29-30/(I)29-30ページ)。だから、交換性向の作用には労働の分割と結合の二側面がある。この点は、スミスの分業論と価値論との論理的関連をおさえるうえで重要な論点となるから、ここであらかじめ注意しておきたい。

ところで、人間の本性たる交換性向が現実^レに発揮され、分業がひきおこされるには、いくつ

かの条件が必要である。スミスによると、それは第一に余剰生産物の存在であり、第二に「交換の確実性」である。このうちの第一の条件についていうと、交換性向が人間の本性であっても、交換に出すべき余剰生産物がなければ、それは発揮しようにも発揮できない。また第二の条件についていうと、たとえ余剰生産物があっても、それらが確実に交換されるのでなければ、つまり「交換の確実性」がなければ、交換性向は発揮されず、したがって分業も発生しないのである。⁸⁾

こう考えると、人間の交換性向が「分業をひきおこす原理」だとしても、その点を指摘しただけでは、分業の発生と展開を十分に説明したことにはならない。そこで、スミスは先の二つの条件のうち第二の「交換の確実性」に問題をしばって、それがいかにして確保され、交換性向の自由な発揮が可能となるかを、第2章につづけて第3章および第4章で検討することになる。

スミスは第3章「分業は市場の大きさによって制限される」の冒頭で、「交換力 (the power of exchanging) が分業をひきおこす」のだが、分業がどの程度展開するかは「市場」(market)の大小による (I, p.31 / (I) 31ページ)、としている。しかし、ここでスミスのいう「交換力」とか「市場」とかはそもそもどういう概念であるのか。第3章の内容に立ち入るまえに、この点を検討しておく必要がある。

まず「交換力」について。先に見たように、人間の交換性向が分業をひきおこすのだが、それが現実に発揮されるのは、「交換の確実性」を前提すれば、余剰生産物の存在する場合にかぎられる。それがなければ、当然だが交換性向は発揮されず、したがって分業もおこりえない。スミスはこう判断し、人間の交換性向は余剰生産物が存在する場合に、はじめて「交換力」として発揮される、と考えた。だから、交換性向は現実には「交換力」としてのみ発揮され、この「交換力が分業をひきおこす」のである。⁹⁾

つぎに「市場」について。スミスが「分業は市場の大きさによって制限される」という場合、その「市場」は分業諸部門が相互に形成しあう販路の総体としての市場ではない。もしそうだとすれば、分業と市場とは表裏一体の関係にあるから、分業が市場によって制約されることはない。ここでの「市場」はそうではなく、人々にとって生産物が確実に交換できるかどうかという意味での、つまり「交換の確実性」の大小という意味での「市場」に他ならない。この点の論証はここでは省くが、「市場」をそう解することで、先のスミスの命題ははじめて意味をもつのである。¹⁰⁾

さて、スミスは「市場」の大小、すなわち「交換の確実性」の大小を制約する要因として、第一に人口密度の濃淡さ、第二に水運の便の良し悪しという地理的環境の二つをあげている。

このうちの人口密度の濃淡さについて、スミスはスコットランドのハイランド地方を例にとって、こうしている。——ハイランドでは人口密度が希薄であり、人々が「8~10マイルも離れて」生活しているから、生産物の交換は容易におこなわれず、「交換の確実性」はきわめて小さい。ハイランドではこのゆえに、交換性向の自由な発揮が制約され、分業はほとんど展開していないのである (cf. I, pp. 31-32/(1) 31-32ページ)。

また、水運の便の良し悪しが「交換の確実性」をどう制約するかについて、スミスはナイル河沿岸のエジプト、ガンジス河流域のベンガル、シナの東部諸省、およびアジア・アフリカの内地地帯を例にとって具体的に説明している。このうちナイル河沿岸のエジプトについていうと、エジプトは「農業においても、製造業においても、いちばん早くから長足の進歩をとげていた国」であったが、それはナイル河が多くの村々に水運の便を提供しており、それがために生産物の交換が容易におこなわれ、「交換の確実性」が保障されたからであった。つまり、エジプトの発達の原因の一つは、水運の便にめぐまれ、交換性向の自由な発揮が早くから可能とされた点にあった。これに対して、アジア・アフリカの内地地帯（古代のスキタイ、近代のタタール、シベリア）では水運の便が極端に悪く、「交換の確実性」が大いにそこなわれたので、「この一大地帯を通じる通商と交易を営むことができなかった」。だから、そこでは分業はほとんど展開されず、現在にいたるも「野蛮で未開な状態」とどまっているのである (cf. I, pp. 34-36/(1) 36-37ページ)。

ところで、「交換の確実性」を制約するのは右の二つの要因だけではない。それはまた諸財貨の交換にともなう「種々の不便」によっても制約される。だから、交換にともなう不便が除去されないかぎり、交換性向は自由に発揮されず、したがって、分業の満開した「商業的社会」(commercial society)も成立しない。では、交換にともなう「種々の不便」はどう除去されるのか。スミスはこうした問題観点から、第4章「貨幣の起源と使用について」を展開するのである。

スミスは第4章の冒頭で、まず「商業的社会」の概念規定をおこない、それを人々が交換性向を自由に発揮しつつ交換によって生活する社会、すなわち分業の隈なく確立した社会だとする。ついで、分業が発生しはじめた当初におこなわれた物々交換をふりかえって、おおよそ次のようにいっている。——物々交換はA・Bの二人がともに相手に必要な生産物をもっている場合のみ成立する。そうでない場合には、余剰生産物があっても、それらは交換されない。だから、物々交換は「交換の確実性」をそこない、交換性向の自由な発揮を制約する。しかし、そのことは人々の利害に反するから、「世故にたけた人」(prudent man)はだれでもそうした

物々交換の「不便」を避けようとし、ある「特定の商品」を「交易の共通用具」にしようとする。そしてここに、交換手段としての「貨幣の起源」がある (cf. I, p.37/(1) 40ページ)。

さて、「交易の共通用具」として最初に選ばれたのは家畜であった。しかし、家畜は損失なしに分割できないから、それで塩を買う場合には、「牡牛一頭分、または羊一頭分の価値で、塩をいちどきに、やむなく買わねばならない」。こうした「不便」もまた「交換の確実性」をそこなう。そこで、人々は家畜にかえて金属を交換手段とすることになった。金属の可分性と溶解性によって、人々は必要な財貨を必要なだけ買うことができるのである。だが、金属は当初粗製の延べ棒のまま使われたので、金属貨幣には重量と品位の確認という「二つの不便」がともなっていた。こうした「不便」もまた「交換の確実性」をそこない、分業の展開を制約する。かくして、人々はその「不便」を避けるために、鑄造貨幣を用いるにいたり、交換にともなう「種々の不便」はここに完全に除去されることになったのである (cf. I, pp. 39-42 / (1) 42-45ページ)。

このようにスミスは、交換にともなう「種々の不便」が除去され、「交換の確実性」が保障されるにいたる過程として、貨幣の歴史を詳細に語っている。しかし、そうした貨幣の歴史は内容的に見れば、人々が交換性向を自由に、そして確実に発揮しうようになる過程であり、それゆえに、分業の限なく確立した「商業的社会」が成立してくる過程でもある。だから、スミスは第4章で貨幣の歴史を語ることで、じつは「商業的社会」の成立史を論理的に描いていたのである。

こう見てくると、第3章の市場論、第4章の貨幣論はともに第2章での議論をうけて展開されており、この両章のいずれにおいても人間の交換性向が立論の基礎にすえられていることがわかる。と同時に、第3・4章では、「交換の確実性」の見地から、交換性向の自由な発揮を制約する諸要因が検出され、それらが「市場」の大小の問題、および貨幣の使用の問題として考察されていることもわかる。だから、通説にあるように第3章と第4章とを切り離し、第4章の貨幣論を分業論とは別個に、それ自体として取り上げることはできない。スミスは第3・4章をともにみずからの分業論の不可欠な一環として位置づけ、展開していたのである。¹¹⁾

(3) 以上、『国富論』第1～4章のスミス分業論を当面の課題に必要な範囲で検討してきた。その要点を摘記すれば、こうである。第一に、スミスは第1章末尾で「文明社会」と「未開社会」とをへだてる巨大な「間隙」を強調し、読者に wonder の感情をかきたてていた。スミスがそうしたのは、その「間隙」をうめ、wonder の感情を「鎮静化」すべく、読者とともに哲

学的探求を試みんがためであった。第二に、そうした哲学的探求は第2章以下で、富裕をもたらす分業がどう発生するかという問題観点からおこなわれていた。すなわち、スミスは第2章でまず、人間の本性たる交換性向が分業をひきおこすとし、ついで第3・4章では、「交換の確実性」の見地から、交換性向の自由な発揮がいかにして可能となり、分業が満面開花するかを検討していた。第三に、スミスはそうした第2～4章のいずれにおいても、人間の交換性向を立論の基礎にすえ、「分業」・「市場」・「貨幣」、そして「商業的社会」という対象をそれにそくしてすべて統一的に説明していたのである。

『国富論』第1章～4章の分業論をこのように整理すると、われわれはそこにスミスに独自の方法を検出することができよう。スミスは『修辞学・文学講義』で、体系的学問を伝達する「講述体」(didactic)には、議論の進め方にニュートンの方法とアリストテレスの方法との二つがあるとしている。このうちのニュートンの方法とは、まず「一つの原理」を定め、それによってさまざまな対象＝現象を統一的に説明し、かつ、それらを「自然の順序」にしたがって「結合」してゆく方法であり、また、アリストテレス的方法とは「一つ一つの現象ごとに一つの原理、通常新しい原理」を示し、さまざまな現象を相互の関係なしに、それぞれ別個に説明する方法である。¹²⁾そして、スミスは前者のニュートンの方法を「最も哲学的な方法」(the most philosophical method)だとして、こういつている。——「ニュートンの方法は道徳哲学あるいは自然哲学等々のあらゆる学問に用いても、アリストテレスの方法よりはるかに創意に富み、それゆえ、より魅力がある。われわれは説明不可能と考えられてきた諸現象が、ある原理からすべて演繹され、一つの鎖で結合されているのを見ると、喜びを感じず¹³⁾と。

スミスはニュートンの方法をこのように高く評価するのだが、それはこの方法が体系的な叙述の方法としてアリストテレスの方法より技術的にすぐれている、という理由からだけではない。それは「天文学史」で表明されたスミス自身の哲学観のゆえにもまた高く評価されるのである。先に見たように、スミスによると「哲学は自然の結合原理の学」であり、またそうであることによって、人々の想像力のある対象から別の対象へと円滑に移行させる「術」でもあった。とすれば、さまざまな対象＝現象を「一つの原理」によって統一的に説明し、「結合」するニュートンの方法は、そうした哲学の本質と目的に完全に合致する。反対に、さまざまな対象を相互の関係なしに、別個に説明するアリストテレス的方法はスミスの哲学観に背馳する。スミスはこう考え、ニュートンの方法を「最も哲学的な方法」として高く評価したのである。

こう見てくると、スミスは『国富論』の分業論を人間の交換性向にそくしつつ、それをただ「一つの原理」として展開しているのだから、われわれはそこに「最も哲学的な」ニュートンの方法を検出することができる。ニュートンは万有引力をただ「一つの原理」とし、それによ

ってさまざまな天体现象を統一的に、かつ簡潔に説明し、また、それらを相互に「結合」することに成功していた。そして、スミスもまた人間の交換性向をただ「一つの原理」とし、それによって「分業」・「市場」・「貨幣」、さらには「商業的社会」という対象——外見上バラバラな対象——を統一的に、しかも簡潔に説明し、かつ、それらを相互に「結合」したのであった。スミスがそうしたのは、分業論の各部分を緊密に関連づけ、読者の想像力を彼の議論にそって円滑に移行せしめるためなのであった。

ところで、ニュートンの方法は哲学の本質と目的に合致した方法であることによって同時に、wonderの感情を効果的に「鎮静化」する方法でもある。事実、ニュートンの「自然哲学」は複雑な天体现象が人々にひきおこした wonderの感情を巧みに鎮めることに成功していた。では、スミスの場合はどうか。先に見たように、スミスは第1章末尾で、「未開社会」と「文明社会」との巨大な「間隙」を強調し、読者に wonderの感情をかきたてていた。そして、この wonderの感情を「鎮静化」すべく、第2章以下で哲学的探求を試みていた。その結果、スミスは第4章にいたって、鑄貨の使用が「交換の確實性」を保障し、人々が交換性向を自由に発揮しうようになると、そこに「商業的社会」が自然に成立する、としていた。この「商業的社会」は分業が隈なく確立し、それゆえに富裕の一般化する社会であるが、スミスはそうした社会の概念を、人間の交換性向のみから演繹したのである。スミスはそうすることで、「未開社会」と「商業的社会」とが人間の本性たる交換性向によって「架橋」しうることを読者に示し、貧しい「未開社会」と豊かな「商業的社会」との「間隙」をうめることに成功したのであった。かくして、読者はいまやスミスとともにその想像力を前者から後者へと円滑に移行させることができ、wonderの感情は自然に「鎮静化」されるのである。

ただし、この「商業的社会」とスミスが頻繁に用いる「文明社会」とは概念的に同じものではない。この両者はともに分業の隈なく確立した社会でありながら、「文明社会」は事実上歴史具体的な資本主義社会であるのに、「商業的社会」は分業論でのスミスの方法(ニュートンの方法)にしたがって析出された方法上の社会概念なのである。つまり、「商業的社会」は人間の本性たる交換性向のみから演繹されており、それはこの意味で、方法上の抽象的で論理的な社会概念なのである。——スミスは「商業的社会」の語を『国富論』第4章の貨幣論でのみただの一度しか用いていないが、それは「商業的社会」が分業論の方法にもとづく抽象的な社会概念であることをスミス自身が自覚していたからなのであった。

「商業的社会」の概念についてはなお論ずべき多くの点があるが、ここでは次の論点のみを指摘しておく。¹⁴⁾——第一点、スミスは交換性向ばかりか節約性向をも人間の本性だとしているが (cf. I, pp.341-342/(I) 534-535ページ)、「商業的社会」の概念化にさいしてはこの節約性向は

方法的に捨象されている。それゆえ、「商業的社会」の構成員は、スミスの人間把握からすれば、人間の二大本性のうちの節約性向を欠いたいわば抽象的人間なのである。第二点、スミスによると、「資本 (stock) の蓄積は、ことの性質上、分業に先行せざるをえない」(I, p.277 / (1) 420 ページ)。しかも、その資本蓄積は「商業的社会」の概念化にさいして捨象された節約性向の作用をつうじておこなわれる。とすれば、「商業的社会」は人間の交換性向のみから演繹されたのだから、それを分業の隈なく確立した社会とすることは論理的にできないはずである。にもかかわらず、スミスがそう規定したのは、「商業的社会」を方法上の抽象的な社会概念として設定したからなのであった。第三点、そうしたスミスの「商業的社会」は通説的に理解されているような「独立生産者の社会」ではない。そう考えることは、「商業的社会」の概念化にさいしてスミスの採った方法を無視することになるのである。¹⁵⁾

1) *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, ed. by R. H. Campbell and A. S. Skinner, 2 vols. in: *Glasgow Edn. of Works of A. Smith*, II. 大河内一男監訳『国富論』(中公文庫)。以下、本書からの引用個所の表示は、原書ページ、訳書ページの順で、本文中にたとえば、(I, pp.14-15 / (1) 12-13ページ)と略記する。なお、訳文には一部手を加えてある。

2) スミスが読者の「讚嘆」と「好奇」の感情をかきたてるのに成功したのは、「とるにたりない」小さなピン製造業を「哲学者」の眼で注意深く観察したことの結果であった。なお、スミスは「天文学史」で「哲学者」を「音楽家」になぞらえ、「音楽家のとぎすまされた耳」(the nicer ear of a musician) が人々には感知しえない音の乱れを鋭敏に聞き分けるのと同様、「哲学者の訓練された思考力」(the more practised thought of a philosopher) は「とるにたりない」事柄のうちに重大な問題を発見する、といっている (cf. *Astronomy.*, p.45).

3) *Astronomy.*, p.34.

4) *Astronomy.*, p.37.

5) cf. 「wonderの感情は……人々に哲学的探求を促す第一原理である」(*Astronomy.*, p.51).

6) *Astronomy.*, pp.41-42.

7) cf. *Astronomy.*, pp.45-46.

8) こうした点は、スミスの次の記述のうちに明瞭に語られている。——「人はだれでも、自分自身の労働の生産物のうち自分の消費を超える余剰部分を、他人の労働の生産物のうち彼が必要とする部分と交換することができるという確実性 (the certainty) によって、特定の職業〔分業労働〕に専念するように促される」(I, p.28 / (1) 28ページ)。

9) なお、スミスは「交換力」の語を第4章の冒頭で再度用いている (cf. I, p.37 / (1) 40ページ)。

10) ここでの「市場」概念についてくわしくは前掲拙稿(上)を参照。

11) 小林昇教授は第4章貨幣論の位置づけに関してこう述べられている。——「この〔『国富論』〕第一編は、第一～第三章が分業論、第四章が「貨幣の起源および使用について」、第五～第十一章が価値・

価格論および分配論（諸所得論）である。……しかし、右の第一～第三章と第五～第十一章とがそれぞれ別個の部分を作成することはあきらかであるから、それをつなぐ第四章は、兩部分の接続の章であり、いわば転調の章であることが知られる」（『小林昇経済学史著作集』I，未来社，162ページ）。しかし、こうした理解には問題があるのではないか。後に見るように、第4章は「商業的社会」の概念を設定することで、分業論と価値論との「接続の章」ともなっているが、そうした第4章はもともと分業論の有機的な一環として展開されているのである。

12) cf. Rhetoric., pp.145-146. 訳. 285-286 ページ。

13) Rhetoric., p.146. 訳. 286ページ。

14) くわしくは前掲拙稿(上)を参照。

15) 以上に見た『国富論』第1～4章の分業論は、その構成の「アイデア」をJ.ハリス『貨幣・鑄貨論』(Joseph Harris, *An Essay upon Money and Coins*, 2 parts, 1757-58. 小林昇訳『貨幣・鑄貨論』東大出版会)に負っている、とする見解がある。たとえば、「分業論からはじまって貨幣の起源にいたる『国富論』の区画はすくなくともそのアイデアにおいてハリスの『貨幣鑄貨論』とひとしい」（堀家文吉郎「貨幣数量説のジョセフ・ハリスにおける熔暗」——『久保田明光教授還暦記念論文集』創元社，300ページ），とされている。また、小林昇教授もこれとほぼ同様の理解を示されている（cf.『小林昇経済学史著作集』III，303ページ）。ここでは、そうしたハリス＝スミスの「継承関係」について早急な結論を下すことは避けねばならない。だが、ハリスにはたしてスミスに見られる強烈な方法意識があっただろうか。スミスがハリスから「継承」したのは、分業論の構成「アイデア」ではなく、むしろ分業論の素材であったのではないか。そして、スミスはその素材をみずからの方法にもとづいて鑄直したのではないだろうか。もっとも、その鑄直しの作業は、「国富論草稿」、『グラスゴー大学講義』の分業論——その構成は『国富論』のそれと異なる——が物語るように、スミスにとって機械的で容易な作業ではなかったはずである。

III スミス価値論とその方法

(1) スミスは『国富論』第4章貨幣論の末尾にいたって、第5章以下の課題は財貨の交換価値分析であるが、その場合の交換価値は同じ「価値」でありながら使用価値とは断然異なるとして、水とダイヤの例をあげつつこういつている。——「最大の使用価値をもつ物が、しばしば交換価値をほとんどもたず、また反対に、最大の交換価値をもつ物が、しばしば使用価値をほとんどもたないことがある。水ほど有用なものはないが、……それと交換にほとんどなにも入手することができない。反対に、ダイヤはほとんどなんの使用価値ももっていないが、それと交換に非常に大量の他の財貨をしばしば入手することができる」(I, pp.44-45/(1)50ページ)。

スミスのこうした議論については、次の諸点に注意を要する。第一に、財貨の効用としての使用価値は、だれにとっても「なじみ深く」、自明である、という点。第二にしかし、そうし

た使用価値と比べると交換価値ははなはだ「奇妙な」対象であり、この両者にはなんらの「類似性」もない。その証拠に「最大の使用価値をもつ物が、しばしば交換価値をほとんどもたない」、という点。第三に、そうだとすると、いったいなぜそうなのかが問題となる。すなわち、「奇妙な」交換価値についての哲学的探求が自然に要請される、という点である。

さて、「天文学史」でのスミスの議論によると、見なれた現象のうちに、それとは「類似性」をもたない「奇妙な」現象が発見されると、精神は動揺し、wonderの感情が刺激されるのであった。そして、人はこのwonderの感情を「鎮静化」すべく、「奇妙な」現象についての哲学的探求を自然に試みるのであった。——こうした「天文学史」での議論を念頭におくと、スミスは先の記述で、財貨の交換価値を「なじみ深い」使用価値と比べることで、その「奇妙さ」を読者に強く印象づけ、wonder感情を刺激していることがわかる。スミスはそうすることで、「奇妙な」交換価値の哲学的探求へと読者を誘っているのである。事実、スミス以後の経済学は水とダイヤモンドの例を「パラドックス」だとし、そこから交換価値の分析へと向かったのであった。¹⁾だから、wonderの感情こそが哲学的探求を導びくとする「天文学史」でのスミスの主張は、先に見た分業論と同様、価値論の展開においても意識的に活かされているのである。

では、スミスはいったいどのような問題観点から、交換価値分析を試みようとするのか。スミスは先の引用文の直前でこういっている。——「人が財貨を貨幣と交換するか、または財貨を相互に交換するにさいして自然にまもるルール(the rules which men naturally observe)とはどんなものか、私は以下これの検討にすすむであろう。こうしたルールは財貨の相対価値または交換価値とよぶべきものを決定するのである」²⁾(I, p.44 (1)49ページ)。スミスはここで、彼自身の価値論＝交換価値分析でなにをどう問題とするか、その課題と分析視角をあらかじめ読者に語っているのである。

先に見たように、人々がその本性としての交換性向を自由に、しかも確実に発揮しうようになると、そこに分業の隈なく確立した「商業的社会」が自然に成立する。そして、この「商業的社会」では人々はすべて「商人」となり、だれでもが「交換によって生活」する。とすれば、「商業的社会」の構成員はいったいどのような「ルール」にしたがって諸財貨の交換をおこなうのか。あるいは同じことだが、彼らはその本性としての交換性向をいかなる「ルール」にしたがって発揮するのか。先の引用文によると、人々が交換性向の発揮にさいして「自然にまもるルール」があるはずなのである。しかも、その「ルール」こそが諸財貨の交換価値を「決定」する。——スミスはこう考えているから、交換性向がいかなる「ルール」にしたがって発揮されるか、その「ルール」の内容を問うことが、彼の交換価値分析＝価値論の中心的な課題となるのである。

ところで、交換性向の発揮にさいして人々が「自然にまもるルール」という場合、スミスはその「ルール」を人々の外部に超越的・先験的にあるものとしては考えていない。それはむしろ、人々の胸中にあって交換性向の発揮を内面的に規制する、とされている。この点は、スミスにおける「ルール」の用例を見れば容易に理解できよう。スミスは『道徳感情論』で「道徳の一般的ルール」(the general rules of morality)、「正義の一般的ルール」(the general rules of justice)について、それがどう形成されるかを問題にして、こういつている。——「他人の行動についてのわれわれの不断の観察は、われわれをして知らず知らずのうちに、なにがなすのにふさわしく、妥当であるか、また、なにが回避するのにふさわしく、妥当であるかに関して、ある種の一般的ルールを形成せしめる³⁾。「われわれが特定の行為を是認したり、否認したりするのは、それらの行為を吟味し、それらが一般的ルールに合致するように思われたり、矛盾するように思われたりするからではもともとない。むしろその反対で、ある種の行為のすべてが……是認されたり、否認されたりするのを経験上見出すことによって、一般的ルールそのものが形成せられるのである⁴⁾」。

『道徳感情論』でのこうした記述から知られるように、スミスにあっては、「道徳の一般的ルール」、「正義の一般的ルール」は人々が日々の行為と経験をつうじてみずから形成するのであり、それはこうしたものとして人々の胸中に定着し、内面的な「行為の基準」となっているのである。そして、こうしたことは、交換性向の発揮にさいして人々が「自然にまもるルール」についても等しくいうことができよう。それは人々がみずから形成したのものとして、彼らの胸中に定着し、交換性向の発揮を内面的に規制するのである。

以上に見てきたように、スミスは交換性向がいかなる「ルール」にしたがって発揮されるかを問いつつ、交換価値分析を試みようとする。だから、スミスの価値論においても分業論と同様、人間の交換性向が立論の基礎にすえられることになる。ただし、分業論と価値論とでは、交換性向の取り上げられ方は異なっている。先に注意したが、スミスは交換性向の作用を労働の分割と結合の二側面で捉えていた。そして、分業論ではこのうちの労働分割の側面で交換性向を取り上げていた。これに対して、価値論ではむしろ労働結合の側面で交換性向が取り上げられることになる。すなわち、スミスは交換性向がいかなる「ルール」にしたがって発揮されるかを問うことで、商品交換をつうじて労働の結合がどうおこなわれるかを、価値論の問題にするのである。

しかし、ここで確認すべきことは、分業論と価値論のいずれにおいても同じ人間の交換性向がそれぞれの立論の基礎にすえられている、という点である。分業論と価値論とでは交換性向

を取り上げる問題観点は異なるのだが、しかし、この両者はともに人間の交換性向を共通の「原理」とし、それにそくして展開されるのである。

(2) スミスは『国富論』第5章「商品の真の価格と名目上の価格」の冒頭で、分業の隈なく確立した「商業的社会」が成立すると、「富の存在様式」は変化するとして、おおよそ次のようにいっている。——「商業的社会」では財貨=商品はその使用価値のゆえにではなく、交換価値のゆえに富となる。そして、ある商品の交換価値はそれが他商品との交換をつうじて支配しうる他人の労働量に等しく、それによってその大きさが「尺度」される。だが、商品が一定量の他人労働を支配するのは、その生産にもともとそれと同量の労働が用いられていたからに他ならない。だから、商品がどれほどの他人労働を支配しうるかは、その生産に用いられた労働量に依存し、この意味で支配労働量と投下労働量とは一致する。それゆえ、諸商品の交換価値、すなわちその支配労働量は、投下労働量によって規制されるのである (cf. I, pp.47-48 / (1) 52-54 ページ)。

スミスはこのように労働価値説を定式化しているのだが、彼がそうした結論に達したのは、交換性向の発揮にさいして人々が「自然にまもるルール」のうちに交換価値の規制原理を見出したからであった。では、そうした「ルール」の内容はどういうものか。われわれはこの点を問うことで、スミスの労働価値説がどのようにして成立したか、その成立の事情について、また、スミスの労働価値説に込められた思想的含意について知ることができるであろう。

スミスは右の「ルール」がいかなるものであるかを、『道徳感情論』で「正義の一般的ルール」の起源と内容を問うた場合と同様、利己的だが同感能力を有する人々の行為と経験にそくして検討する。——スミスによると、交換当事者はそれぞれに利己的で、「自分の有利となるように仲間の自愛心を刺激」しつつ商品交換をおこなう。だから、彼らはともすれば仲間の利害を無視し、自分の利害をそれに優先させようとする。しかし、そうすることは「公平な観察者」の是認するところではない。それはむしろ、「フェア・プレーの侵犯」として否認され、処罰の対象とされるのである。そこで、人々はその否認と処罰を避けるために、商品交換にさいして相互に「想像上の立場の交換」をおこない、仲間の利害を尊重しようとして自然に努力する。そして、その相互的な努力の結果、交換当事者たちの利害は正確に一致するようになる。ところで、彼らは商品の生産にいずれも「本源的購買貨幣」としての労働（「労苦と骨折り」）を費やしているから (cf. I, pp.47-48 / (1) 52-53 ページ)、彼らの利害が一致するのは、一方の費やした「労苦と骨折り」が他方のそれによって正当に償なわれる場合にかぎられる。そして、「公正な観察者」はこの場合にのみ交換当事者の双方を是認するのである。人々はこのことを商品

交換を日々くりかえすうちに経験的に自覚し、かくして、諸商品をそれらの生産に用いられた労働量の割合におうじて交換するようになる。「商業的社会」の構成員にとっては、そうすることが交換性向の發揮にさいして「自然にまもるルール」とされるのである。

こうしたスミスの「ルール」理解については、ここで次の諸点に注意を要する。第一に、先に述べたことだが、その「ルール」は人々が商品交換にさいして相互に「想像上の立場の交換」をおこないつつみずから形成したのものとして、人々の胸中に定着し、交換性向の發揮を内面的に規制する、という点。第二にだから、その「ルール」は外在的な「法則」ではなく、人々が自然にまもる法、すなわち自然法だ、という点。スミスによると、人間は利己的だが同感能力を有し、しかも交換性向をそなえている。そして、そうした人間がみずから社会的規範としての「ルール」を形成するのだから、その「ルール」は人間の本性に見合った自然法なのである。第三に、人々がその「ルール」にしたがうかぎり、各人の利害は尊重され、また相互に一致するから、そこに「自然的正義」が実現される、という点。人々はもちろん利己心にかられて「欲得づくの交換」をおこなうのだが、それでも「ルール」がまもられるかぎり、彼らは正義を實踐する。そしてこのゆえに、「商業的社会」はバラバラな諸個人の「欲得づくの交換」にもかかわらず、一個の社会として存立しうるのである。⁵⁾ 第四にだから、「商業的社会」を形成し、維持するためには、人々をしてその本性たる交換性向を自由に發揮せしめるだけでよい。それ以外は一切不要だ、という点。交換性向が自由に發揮されるならば、一方では労働の分割がおこなわれ、分業の限なく確立した「商業的社会」が自然に成立するのだが、他方ではそれと同時に、交換性向をどう發揮し、分業労働をいかに結合すべきかについての「ルール」が人々のあいだに形成され、その「ルール」によって「商業的社会」が維持される——スミスは自然法論者としてこう考えたのである。

スミスは交換性向の發揮にさいして人々が「自然にまもるルール」の内容を以上のように理解し、その「ルール」(=自然法)のうちに交換価値の規制原理を見出した。スミスの考えはこうである。——人々が交換性向を右の「ルール」にしたがって發揮するならば、彼らの労働は商品交換をつうじて等しい割合で結合される。と同時に、彼らは他人労働(=社会的労働)に対して一定の「支配力」を獲得する。そして、この「支配力」こそ諸商品の交換価値に他ならない。だが、その「支配力」すなわち支配労働量は、人々が「ルール」をまもり、正義を實踐している以上、商品の生産に彼らが費やした労働量に正確に一致するであろう。だから、諸商品の交換価値の大きさは、それに含まれる労働量によって規制される。スミスはこう考え、労働価値説を交換価値の規制原理として樹立したのである。

このように見てくると、スミスの労働価値説に込められた思想的含意も明らかとなる。スミスは交換性向の發揮にさいして人々が「自然にまもるルール」があるはずだとし、しかも、その「ルール」を人間の本性から発した、したがって人間の本性に見合った自然法だと考えた。そして、スミスはそうした「ルール」=自然法の内容を問うことで労働価値説を樹立したのであった。だから、スミスの労働価値説の背後にあってそれを支えているのは、スミスの自然法思想に他ならない。いなむしろ、スミスの労働価値説は彼自身の自然法思想の一つの具体的な表現様式なのである。⁶⁾——この点は、労働価値論史におけるスミスの個性的な位置と意味とを浮き彫りにするうえで重要な論点となるであろう。だが、こうした問題に立ち入ることは本稿の課題ではないから、ここではただ問題の所在を確認するだけにとどめたい。

(3) 以上、『国富論』第5章でのスミス価値論の内容を当面の課題に必要な範囲で検討してきた。その要点を摘記すればこうである。第一に、スミスは使用価値とは「類似性」をもたない交換価値の「奇妙さ」を強調し、読者に wonder の感情をかきたてていた。スミスがそうしたのは、その wonder の感情を「鎮静化」すべく読者とともに交換価値の哲学的探求を試みるがためであった。第二に、その哲学的探求は、人々の交換性向がいかなる「ルール」にしたがって發揮され、労働の結合がどうおこなわれるか、その「ルール」の内容を問うことでおこなわれた。第三にその結果、スミスは交換価値の規制原理として労働価値説を樹立し、交換価値の「奇妙さ」が読者にかきたてた wonder の感情を「鎮静化」したのであった。第四に、そうしたスミスの労働価値説は彼自身の自然法思想の一つの具体的な表現様式なのであった。⁷⁾

スミス価値論の内容をこのように整理したうえで、本稿のこれまでの分析を方法の観点からふりかえてみよう。——スミスは人間の本性たる交換性向こそが分業をひきおこすとし、それにそくして分業論を展開していた。そしてさらに、この交換性向がいかなる「ルール」にしたがって發揮されるかを問いつつ、価値論を展開していた。だから、スミスは分業論と価値論のいずれにおいても人間の交換性向を立論の基礎にすえ、それをただ「一つの原理」としてそれぞれの議論を展開していたのである。つまり、スミスは「最も哲学的な」ニュートンの方法に立脚して、『国富論』第1～5章の分業論と価値論を展開したのである。その結果、スミスは「分業」・「市場」・「貨幣」・「商業的社会」ばかりか、さらにはこの「商業的社会」を媒介環として「交換価値」をも、人間の交換性向によってすべて統一的に説明し、かつ、それらを「結合」したのであった。スミスがそうしたのは、『国富論』の分業論と価値論に「自然の結合原理の学」たる「哲学」の実質を与え、読者の想像力を彼の議論(「分業」→「市場」→「貨幣」→「商業的

社会」→「交換価値」)にそって円滑に移行せしめんがためであった。そして、みずからの体系的主張を読者に無理なく自然に伝達するためなのであった。

しかし、「自然の結合原理の学」たる「哲学」が人々の「一般的信用」(general credit)をかちうるためには、その「結合原理」が人々にとって「なじみ深い」(familiar)ものでなければならない。スミスにそくしていえば、「どのような〔哲学〕体系も、その結合原理がすべての人々になじみ深いものでなければ、ほかの点でいかによく支持されていようと、人々の一般的信用をかちうることはできなかつた⁸⁾」のである。スミスのこうした主張は、ニュートンの「自然哲学」についての彼の評価となって具体的にあらわれている。スミスによると、ニュートン力学の「結合原理」たる万有引力は、物体の重さとして感覚的にとらえるものであり、それはこの意味で、人々にとって「なじみ深い」ものであった⁹⁾。人々は感覚的につかみうる物体の重さによって、地上であると天上であるとを問わず物体の複雑な諸運動がすべて「結合」され、また、統一的に説明されたからこそ、ニュートン力学に「一般的信用」を与えた、とスミスはいうのである。——こうしたことは、スミス自身の分業論と価値論についても同様にいう。スミスがそこで「結合原理」とした人間の交換性向は、人々が日々の商品交換にさいして現実に発揮しており、それはこの意味で、人々にとって経験的に確認しうる「なじみ深い」ものであった。とすれば、『国富論』の読者は彼らが日々発揮している交換性向によって、「分業」・「市場」・「貨幣」・「商業的社会」・「交換価値」——それらは外見上バラバラな諸対象である——がすべて「結合」され、統一的に説明されているのを見て、ニュートンに与えたのと同様の「一般的信用」をスミスに与えるであろう。スミスは「なじみ深い」交換性向を「結合原理」とすることで、『国富論』第1～5章の分業論と価値論を読者に受容せしめることに成功したのである¹⁰⁾。

1) ただし、「水とダイヤモンドのパラドックス」に注目したのは、スミスが最初ではない。それは、J. ローによって (cf. John Law, *Money and Trade consider'd*, 1705. p.4. 吉田啓一訳『貨幣と商業』泉文堂, 4-5 ページ), また, J. ハリスによって (cf. Harris, *op. cit.*, p.5. 訳5-6 ページ) すでに指摘されている。

2) ここでの“rule”には従来「法則」・「準則」の訳語があてられていたが、本稿ではそれを用いず、「ルール」とした。その理由は行論のうちに明らかとなるであろう。

3) *The Theory of Moral Sentiments*, ed. by D. D. Raphael and A. L. Macfie. in: *Glasgow Edn. of Works of A. Smith*, I. p.159. 米林富男訳『道徳情操論』(未来社), (上), 344 ページ。以下、本書からの引用は、このグラスゴー版『スミス全集』により、引用個所の表示は、たとえば、

Moral Sentiments., p.159. (上) 344 ページ, と略記する。なお, 訳文には一部手を加えてある。

4) Moral Sentiments., p.159, (上) 345 ページ。

5) cf. 「社会に住む人々がだれ一人として相互になんらの義務も感ぜず, また, 感謝の気持ちで結ばれていないとしても, なお, 社会は合意的な価値評価 (an agreed valuation) にもとづく各人の助力の欲得づくの交換 (mercenary exchange) によっても維持することができるのである」 (Moral Sentiments., p.86, (上) 203 - 204 ページ)。

6) ここで「一つの」としたのは, 第一に, スミスの自然法思想には「主体的自然法」と「客体的自然法」との二側面があり (cf. 内田義彦『経済学史講義』未来社, 104 ~ 106 ページ), スミスの労働価値説は本文で見たかぎりではこのうちの「主体的自然法」の表現様式だからである。しかも第二に, この「主体的自然法」は『国富論』体系の「大枠」としてその部分部分に浸透しており, なにも労働価値説にのみ具体的に表現されているわけではないからである。なお, スミスの自然法思想が『国富論』体系を貫ぬく「大枠」の「概念装置」であるとの理解は, 内田義彦『読書と社会科学』(岩波新書) から学んだ。

7) 本稿では, 『国富論』第6章で展開されたスミスの価格論, 剰余価値論に立ち入る余裕はない。不十分ではあるが前掲拙稿(下)を参照されたい。

8) Astronomy., p.46.

9) cf. 「地表における重力がどのようなものかは, 経験が教えてくれる」 (Astronomy., p.98)。「あらゆる物体の性質のうちでも, その重さは, 慣性 (inertness) について, われわれにもっともなじみ深いものである」 (Astronomy., p.104)。

10) ありうべき疑問に対して一言。スミスは『国富論』全5編をニュートンの方法のみに立脚して展開しているわけではない。たとえば, 第1編8章以下の分配論では, 賃銀・利潤・地代の自然率を規制する諸原理は, 相互の関係なしにそれぞれ別個に説明されている。つまり, 分配論ではニュートンの方法ではなく, 「一つ一つの現象ごとに一つの原理」を提示し, 「さまざまな現象を別個に説明」するアリストテレス的方法が採られているのである。

〔編集後記〕

酒井進所員の力作をお届け致します。日頃地理学を専門とする私などは、アダム・スミスからはかなり縁遠い所にいますが、この論文を興味深く読ませて頂きました。適切なコメントは無理なのですが、少し強引に（地理学に近づけて）感想を述べる事にします。

本論では分業論と価値論をつなぐ「結合原理」として、人間の「なじみ深い」交換性向の存在に注目されたと思います。恐らくこの「なじみ深さ」(familiarity)が、スミスの学問的なスケールの大きさにもつながり、数多くの著名な社会科学者の輩出をみたのでしょう。

伊坂市助氏がかつてスミスの魅力について次の様に書いておられます。「スミスの学問的大遺産にと同様に、ひとは伝えられる彼の品格にも、多くの魅力を感じるようである。彼の風貌はどんな写し画を見ても、温厚そうに、かつ気品をそなえており、いずれの伝記にも、公正な正義感の強く、友誼に篤い、そして忍耐力に秀でた真底の学者肌的人物」(「アダム・スミスと現代」同文館、1977)と。この様な人物だからこそ、酒井所員も指摘された如く、読者の想像力を「分業」→「市場」→「貨幣」→「商業的社会」→「交換価値」へ無理なく、自然に伝達できたように思います。つまり、スミスには「一般的信用」(general credit)をかちとりえる品位が備わっていたようです。

ところでスミスの議論の展開で、地理学を専攻している者にとって、特に興味を覚えたのは最初の分業の部分、つまり第2章「分業をひきおこす原理」です。酒井所員によれば、交換性向が現実に発揮され、分業がひきおこされる条件として、余剰生産物の存在と交換の現実性の大小、つまり市場の大小が指摘され、さらに後者の条件の制約要因として二つの地理的環境と諸財貨の交換にともなう「種々の不便」があげられている。このうち前者の地理的環境として、人口密度の濃淡さは理解できるとして、水運の便の良し悪しといった一元的な水運重視の論理は、当時の具体的な事例をよく踏まえているとはいえ（帰納的な説明）、空間認識を客観的に統一しようとする地理学にとってはやや疑問が残ります。

最後に蛇足ですが、スミスを多少なりとも取り扱った地理学の論文をあげておきます。

高橋潤二郎（1961）：経済活動の地理的側面に関する古典学派の諸説。三田学会雑誌，54巻5号。

藤田 佳久（1972）：古典派経済学の空間認識——アダム・スミスの地代論を中心に——

奈良大学紀要，1号。

(Y. F.)

神奈川県川崎市多摩区東三田2丁目1番1号 電話(044)911-8480(内線33)

専修大学社会科学研究所

(発行者) 三輪芳郎

製作 時潮社

東京都文京区本郷2丁目12番6号 電話(03)811-8024
